

アッシリア帝国東部辺境を掘る

—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト、
第3次(2018年)—

西山 伸一 中部大学人文学部准教授

ハーシム・ハマー・アブドゥッラー スレーマニー博物館館長

山田 重郎 筑波大学人文社会系教授

沼本 宏俊 国士館大学体育学部教授

常木 晃 筑波大学人文社会系教授

Excavating the Eastern Fringe of the Neo-Assyrian Empire: Yasin Tepe Archaeological Project (YAP), Iraqi Kurdistan, the Third Season (2018)

NISHIYAMA, Shin'ichi Associate Professor, College of Humanities, Chubu University

ABDULLAH, Hashim Hama Director, Slemani Museum

YAMADA, Shigeo Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

NUMOTO, Hiroto Professor, Faculty of Physical Education, Kokushikan University

TSUNEKI, Akira Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

西山
伸一／ハーシム・ハマー・アブドゥッラー
ほか

1. はじめに

YAP(Yasin Tepe Archaeological Project)は、イラク共和国クルディスタン自治区スレーマニー(スレイマニーヤ)県南部、シャフリゾール平原西部に位置するヤシン・テペ遺跡の第3次調査を2018年8月18日から9月20日まで実施した。今シーズンのタスクは以下の4つであった。1)2017年に調査した未盗掘レンガ墓から出土した遺物の緊急的保存修復処理と整理作業、2)集落構造を明らかにするための「下の町」東半分における地下探査(範囲については図1参照)、3)「下の町」東部における考古学踏査、および4)遺跡近郊の考古学踏査である。今回の調査は、緊急性の高い1)、および2)を優先的に実施した。

さて、2018年の調査であるが、2017年9月にクルディスタン自治区の独立を問う住民投票が強行された結果、ハウラー(アルビール)とスレーマニーの国際空港が長期にわたり閉鎖されたため、一時実施が危ぶまれた。しかし、2018年5月に空港閉鎖がとかれ、なんとか調査を実施することができた。例年であれば、冬季(2~3月頃)に出土遺物の整理作業を行うのであるが、今回は空港閉鎖のため渡航ができなかった。そのため整理作業の一部を夏季に実施した。また、2017年11月にはイラク・イラン国境地帯でマグニチュー

ド7.9の巨大地震があった。イラン側では大きな被害が出たが、幸いスレーマニー県の被害は小さく、博物館や文化財局は無事であった。このように2018年の調査は開始されるまで、現地の政治状況や自然災害にやきもきすることが多かった。

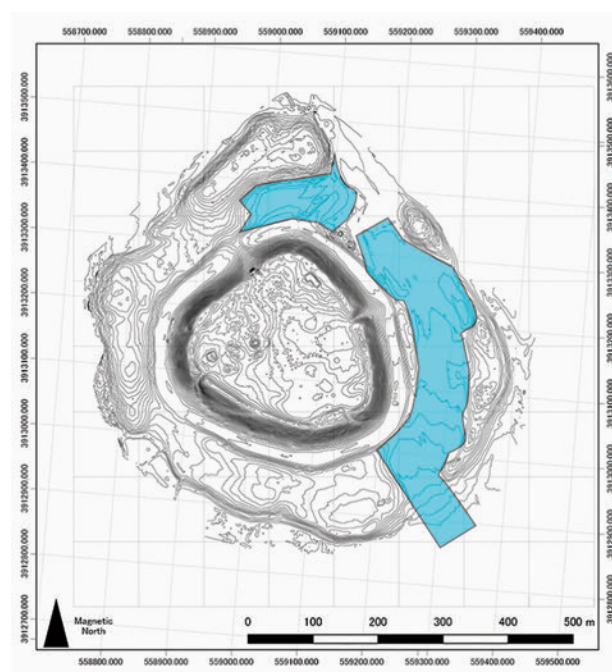


図1 ヤシン・テペ遺跡平面図と地下探査実施範囲(■部分)



図2 2017年に発見された未盗掘レンガ墓

2. 未盗掘墓出土遺物の保存修復

今回の調査でまず取り組んだのは、2017年に発見した新アッシリア時代の未盗掘レンガ墓(図2)から出土したさまざまな遺物の整理作業と緊急的保存修復措置であった。以前述べたように、このレンガ墓からは、2時期にわたる埋葬が確認された。第1次の埋葬(2〜3名?)は、レンガ敷きの床面に遺体や副葬品が置かれた埋葬である。第2次の埋葬は、最初の埋葬を土で覆った後、テラコッタ製棺が墓室に挿入され、遺体はそこに埋葬された。この棺には複数体の遺体(5名?)が埋葬されており、今後の研究によって親族関係が明らかになると考えられる。昨年報告したようにこの墓はアッシリア文化の影響を強く受けたものであり、ヤシン・テベ遺跡にアッシリア文化が確実に流入していることを示している。

さて、レンガ墓からの出土遺物のうち金属器、特に青銅製品が著しく腐食しているのが目立った。これらの遺物の写真撮影や実測作業のためには、まず応急的な保存修復措置が必須であった。今回は、青木繁夫東京藝術大学客員教授の奮闘により、2週間弱の短期間



図3 2017年出土遺物の保存修復作業風景



図4 レンガ墓から出土したテラコッタ製棺(クリーニング後)

で青銅製品を中心に基本的な保存修復措置が施されることとなった(図3)。将来的にはこれらの遺物をスレーマニー博物館に展示することを考えている。そのためにはさらに時間をかけた保存修復措置が必要となってくるだろう。

また上述したテラコッタ製棺は、墓室から取り出し、スレーマニー博物館に運び込まれていたが、未清掃の状態であった。今回、将来の展示を見据えて棺のクリーニングを行うとともに(図4)、3D画像作成のための写真データを撮影した。クリーニングの結果、棺のすばまった部分(遺体の足がむく方向)の内面の底近くに、内側から外側へ貫通する穴が開いているのが確認できた。この穴は、おそらく遺体から出る水分を棺外に導く穴であると考えられる。これは形態が類似するその他の棺で多く見られる特徴である。

今回の出土遺物の整理作業で特筆すべき成果を2点記しておく。1つは、楔形文字資料の発見である。遺物は、青銅製のトルク形ネックレスである。このネックレスは、Operation Aで2017年に検出した小型Reception Suiteの床面直上で発見された(図5)。ネックレスの近くでは、フェニキア文化の影響を受けた



図5 楔形文字碑文が刻まれた青銅製トルク形ネックレス



図6 レンガ墓から出土したビーズの一部：2ミリ程度のビーズは下段右端



図7 青銅製筒形製品：おそらく家具装飾品の一部



図8 鉄製鏃：レンガ墓から武器の出土は珍しい

ファイアンス製スカラベ型印章(破損)が発見された。今回、青木客員教授によるクリーニングによってネックレスの三日月型をした青銅製板に2行にわたる奉納碑文があるのが発見された。山田重郎筑波大学教授の解説によれば碑文は、ナブー神殿に(神殿奴隷として)息子をささげる内容とのことである。この遺物については近々に出版し、学界の意見を仰ぐ予定である。この文字資料は書体や碑文の形式から確実に新アッシリア時代に年代づけられるという。この発見によって、今後さらなる文字資料の発見に期待が持てる。

もう1つの成果は、棺の内部に堆積していた土壌(すべて採取し、保管していた)を精査した結果、数百点に達すると考えられる直径2ミリ程度のきわめて小さなビーズ類が発見されたことである(図6)。ビーズは、カーネリアン、ファイアンス、メノウ、金などからなり、この時代のアッシリア風の埋葬としてはかな

り豪華なものであることが判明した。この極小ビーズ以外にも、さまざまな形態をしたビーズが発見された。例えばバタフライ型(図6上段)、孔が二カ所に穿たれた二連型ビーズ(図6下段左端)などである。今後、このような特徴的なビーズの類例を調べることで、文化交流の範囲をおさえることができるかもしれない。ビーズの石材にはクルディスタンで採取されるブルーシスト(青色片岩)なども含まれ、ビーズの原料採集地、製作地、および製作方法の問題にアプローチする資料が得られている。ビーズ以外では、金製と銀製の指輪、イヤリング、象牙製品(櫛?)、ガラス容器、青銅製の家具装飾(図7)、鉄製鏃(図8)、さらに30点あまりの完形土器が含まれていた。これらのクリーニングを終え、一部を写真撮影し、実測図を作成した。将来的には、墓出土の遺物を一括して博物館で展示したいと考えている。

3. 「下の町」の地下探査

今シーズンのフィールド調査の中心は地下探査であった。これは過去2シーズンの発掘によって1)鉄器時代の層が「下の町」東部に広く分布していること、2)鉄器時代の層は、表土層直下で発見されていること、以上のことから地下探査を導入して「下の町」の都市構造を明らかにし、将来の調査戦略を考えるデータを得ようと考えたからである。地下探査は、ドイツの探査会社(Eastern Atlas GmbH)に依頼した磁気探査(図9)と、筑波大学の機材を使用したレーダー探査を実施した。前者については、遺跡の「下の町」の東半分の大半(約6ヘクタール)をカバーする探査を行った。後者については過去2シーズンの発掘調査区近郊を含む南東部分の数カ所で実施した。

目下取得したデータは分析中であるが、成果がでてきているのは磁気探査である。東半分の「下の町」では、さまざまなアノマリー(異常部)が検出された。興味深いのは「レンガ墓」と思われる複数のアノマリーと、探査会社が「溝もしくは運河」と呼ぶ線状のアノマリーである。すでに検出されたレンガ墓のように、墓が比較的裕福な家族によって構築されているとすると、「下の町」に複数の墓があっても不思議ではない。

また町の内部に線状のアノマリーがいくつか見えるが、これを「下の町」の住宅区を分ける「周壁」とみなすよりも、「水路もしくは運河」と考える方が適切な気がしている。というのも、現在でもヤシン・テベ周辺は、水が豊富にあり、バスタンスールの泉を水源とした水路が遺跡周辺を複数流れている。シャフリゾール平原を北西から南東に流れ、ヤシン・テベの西にあるタンジェロ川も豊かな水量を誇っている。冬季になると雨が降るため、川や水路の水量が増加する。そのため水を含んだ土壌が非常に柔らかくなり、車両や徒歩での遺跡へのアクセスが困難となる。たとえば、冬季でなくても降雨の後には、土壌が柔らかくなり遺跡に近づくのが難しくなるのである。古代においても豊かな水と水を含んだ土壌の状態が現在とそれほど変わらないと仮定すると、ヤシン・テベのような拠点都市を維持するために必要な人や物資を定期的に輸送することは、水路や運河を使うことではるかに容易となると推測できる。さらに、これらの水路や運河が「下の町」の内部まで伸びていた可能性も指摘できる。想像をたくましくすれば、ヤシン・テベは、水量豊富な土地に立地した、ちょうどヴェネツィア、アムステ

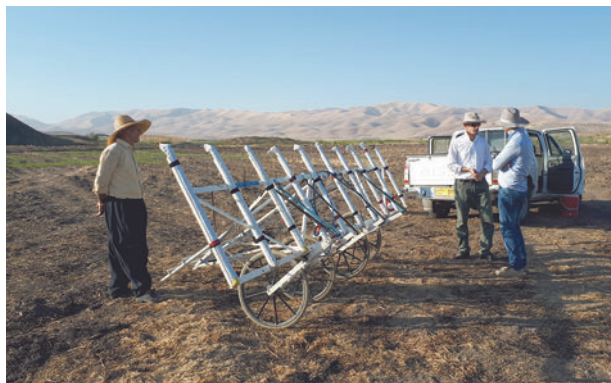


図9 ドイツの地下探査会社による磁気探査用機材

ルダム、大阪などのような水都(すいと)と考えればわかりやすいであろうか。この線状のアノマリーについては、ヤシン・テベの都市構造を知るうえで極めて重要と思われるため、近い将来発掘調査によって確認したいと考えている。

4. 「下の町」東部と遺跡周辺の考古学踏査

最後に遺跡踏査について述べる。踏査は、ヤシン・テベの「下の町」東半分と、近郊のテル型遺跡を踏査した。「下の町」では、土地区画を利用しつつ地表面をいくつかのエリアにわけて数名でくまなく歩きながら遺物を採集した。採取された遺物の大半は土器片であり、大まかな分類によれば、大半は鉄器時代の土器であった。このことから「下の町」東半分の広い範囲には鉄器時代の層が存在することが表面踏査によっても明らかになった。将来的には採取された土器片を分析し、器種や胎土などから埋蔵する遺構の性格に迫れるか検討したい。

ヤシン・テベ近郊の踏査では、まず遺跡のすぐ南方にある2つの遺跡(ニスカー・ジョウ、ハーク・ホル)を調査した。遺跡をいくつかの区画にわけ、数名で各区画から遺物を採集する方法をとっている。また、2キロ圏内にある2つの遺跡(テル・マーリフ、テル・カラゴル)も踏査した。これらはいずれも鉄器時代の土器が採集されたことから、新アッシリア時代のヤシン・テベと同時期に存在した集落である可能性が高い。これらの近接する集落は、これまで見落とされがちだった都市の近郊における集落の配置を研究するデータを提供してくれる。また、特筆すべきは、ハーク・ホールとカラゴルにおいて鉄器時代と思われる焼成レンガ片が採集されたことである。焼成レンガの存在は、集落になんらかの大型建造物もしくはレンガ墓が存在した可能性がある。



図 10 デスカラ遺跡遠景：マウンドが村によって浸食されている

上述の遺跡以外では、ヤシン・テペから南西に延びるワディ溪谷を踏査し、2つの遺跡を記録した。この溪谷は、ヤシン・テペに南西方向からアプローチするルート上にあると考えられる。ここでは、ヤシン・テペから約5キロ南西にあるデスカラ(図10)、さらに5キロ南西に進んだ溪谷の一番奥にあるアハマド・アワを踏査した。どちらも鉄器時代の痕跡を含むが、前者は、ハラフ期から青銅器時代までの厚い堆積、後者はイスラーム時代の厚い堆積が確認できた。このうち、デスカラは、村の住宅によりマウンド周辺が著しく削平されており、緊急的な調査と記録が必要であると感じた。

5. まとめと展望

2018年は、スケジュールの都合上、発掘調査を実施しなかったが、有意義な成果をあげられたと思う。まずは、レンガ墓からの出土遺物について保存修復措置が行われ、観察・記録のための遺物の取り扱いが容易になったことである。また整理作業中に、思いがけない楔形文字資料の発見もあった。残念ながら碑文の中に都市名など場所についての言及はないが、将来の文字資料の発見に期待が高まる成果といえる。

地下探査については、特に磁気探査により広範囲な埋蔵遺構のデータが得られたことが大きい。これによって発掘調査のみにたよらない「下の町」の都市構造にアプローチできる手掛かりがつかめた。今後は、磁気探査とレーダー探査の成果をもとに戦略的に発掘を展開していくことで特徴的なアノマリーの検証を行っていきたい。

遺跡内の踏査では、「下の町」東半分には鉄器時代の堆積層が確実にあることが確認できた。将来的に可能であれば、「下の町」全体に踏査範囲を広げ、採集遺

物からヤシン・テペの歴史にアプローチすることも考えている。

最後に遺跡近郊の踏査では、遺跡のすぐ周辺および2キロ圏内に小規模集落が存在していることが確認できた。今後はリモートセンシングなどのデータも活用して、新アッシリア時代のヤシン・テペ周辺の集落景観の復元にアプローチしたいと考えている。

なお、本プロジェクトは科学研究費補助金・基盤研究(A)(一般)「文献学・考古学の協働による紀元前18-8世紀の上メソポタミアの歴史研究」(代表：山田重郎・筑波大学教授)(課題番号16H01948)、基盤研究(B)(海外学術)「古代メソポタミア北東部における歴史考古学的研究」(代表：沼本宏俊・国士館大学教授)(課題番号18H00743)、新学術領域研究(研究領域提案型)「都市文明の本質」計画研究A02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」(代表：山田重郎・筑波大学教授)(課題番号18H05445)、および中部大学特別研究費(A)の支援を受けた。

なお、共著者以外では、青木繁夫・東京藝術大学客員教授、安間了・徳島大学大学院教授、辰巳祐樹・筑波大学非常勤研究員、Othman Tawfeeq Fattah・スレーマニー大学講師、Rawa Karim Salih・スレーマニー文化財局職員、Jeanine Abdul Massih・レバノン大学教授、Mouhamad Abdel Sater・レバノン大学大学院生の参加を得ることで今シーズンを無事終えることができました。各人の奮闘努力に心より感謝いたします。最後に、いつも変わらぬ全面的なサポートをいただいているスレーマニー文化財局局長Kamal Rash-eed Raheem氏に深く感謝申し上げます。

参考文献

- ・Slemani Directorate of Antiquities and Japanese Mission to Yasin Tepe, 2018. *Yasin Tepe Archaeological Project (YAP): Field Report of the 2018 Season at Yasin Tepe, Shahrizor Slemani* (Submitted to Slemani Directorate of Antiquities in November 2018).
- ・西山伸一・常木晃・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・沼本宏俊・山田重郎・渡部展也 2017「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第1次(2016年)」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集：平成28年度考古学が語る古代オリエント』pp.16-20. 日本西アジア考古学会
- ・西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・常木晃・山田重郎・沼本宏俊 2018「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第2次(2017年)」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集：平成29年度考古学が語る古代オリエント』pp.17-21. 日本西アジア考古学会